

ポヤッツの徴兵騒動

フランツォースの小説『ポヤッツ』に見る西欧近代へのアンビヴァレンツ

武田智孝

はじめに

フランツォースはマイナー・ポーエツトだが、我が国でも既に幾つかエッセーや論文が発表されていて、平野嘉彦『獣たちの伝説』は、フランツォースを西欧中心主義の啓蒙主義者として批判的に論断し、¹⁾ 学会誌「ドイツ文学」117号掲載の伊狩裕『道化師』論は「18世紀以来の古典的啓蒙主義の、最後の闘士」と位置づけている。ただ、伊狩は同時に、世紀転換期西欧の激しい反ユダヤ主義に直面して、同化、啓蒙へのフランツォースの信念が晩年にいたって揺るがざるをえなかった、とも指摘している。²⁾

「半アジア」的ガリツィアの後進性を批判して、西欧化・近代化の必要を訴える「啓蒙主義者」フランツォース、というのが定説だが、文学テキスト、特に代表作『ポヤッツ(Der Pojaz)』には、大国による領土的野心と植民地政策に戸惑い、抵抗するガリツィア・ユダヤ人の悪戦苦闘ぶりが、様々な形で描き込まれている。西からの「近代化」の波に怯えるのは何もハシッド派のラビたちばかりとは限らない。辺境の地に「西欧近代」は先ず、大国のナショナリズム、軍事力増強に向けての徴兵制整備といった形でやって来たからである。また、主人公の西欧文化への憧れという点に関して、「ねじれ」とでも呼ぶほかない複雑な心情が映し出されているように思う。

作家としてのフランツォースは、言われるほど一面的な西欧文明至上論者でも、単純な啓蒙主義者でもなかったのではあるまいか。拙論ではその点を検証してみたい。

ガリツィア・ユダヤ人の「仇敵」たち

先ず、小説『ポヤッツ』(1892/1905)について簡単に紹介しておこう。

主人公は演劇青年だが、もともとはウソと悪戯の天才である。その呼び名となったポヤッツ(Pojaz)は Bajazzo のイディッシュ語訛り、意味は「道化(師)」だが、実際には、おどけ者、悪戯者、たわけ、に近い。物まねが巧みで、声色を使い始めると、皆、当の本人が目の前にいるかのような錯覚に陥る。この特技を活かして、盛んにティル・オイレンシュピーゲルばりの悪戯をやらかす。それが呼び名の由来である。彼が演劇を天命と知り、演劇青年になるきっかけも、この模倣と演技の才にあった。

ポヤッツは孤児で、彼が生まれる前に死んだ父親はメンデレ・グラットアイス

(Mendele Glatteis)といい、シュノラー(Schnorrer)だった。これは「たかり屋」「乞食」「浮浪人」などと訳されるが、その最良の在り様では、一所不住のお笑い旅芸人、歌手、そして何よりも「生きた二本足の新聞(eine lebendige zweibeinige Zeitung)」として、知識欲旺盛なユダヤ人の好奇心を癒してまわる、当時の東欧ユダヤ人社会に独特な一種の文化的・社会的な装置だった(S.15)。

メンデレはさすらいの範囲が広く、情報量豊富で、想像力に富み、話芸にも秀でていたので「シュノラーの王」(S.27)と呼ばれた程だが、無欲で、心優しくもあった。いくら勧められても結婚しようとしなかったのに、ある地方に来たとき、疫病の流行で親兄弟を失って、生きる気力をなくしてしまった女の子を哀れに思い、心を込めて世話をしているうちに情が移って、妻に娶った。それから一年ほどして彼は死に、若い妻も子供を産んですぐ後を追うように亡くなった。二人の最期を看取ったのは、ローゼレ・クアレンダー(Rosele Kurländer)で、彼女がそのまま赤ん坊の育ての親になる。バルノウ(Barnow: フランツォースの生まれ故郷の町チョルトコフ[Czortków]がモデル)という町の入り口で通行税徴収掛をして暮らしを立てている貧しい女である。これが1832年のこと、それから20年余りにわたってのこれは物語である。

こうして東ガリツィアのイディッシュ語の世界に生まれ育ったユダヤ人青年がひよんなきっかけからドイツ語演劇の魅力に取り憑かれ、その舞台に立つ日を夢見て、逆境の中、ドイツ語、ドイツ文学、演技法を学ぶが、道半ばにして病を得、22歳の誕生日を目前にして世を去る、というのがこの小説のミニマルストーリーである。

キリスト教社会との障壁を果敢に乗り越えようと企てる東方ユダヤ人の挫折、これがフランツォース文学の基本的モチーフで、この小説も例外ではない。

主人公の越境を阻んだのは病気だが、これは東ガリツィアの厳しい冬の最中、彼が読書のために通った修道院の火の気のない、氷室のような図書室のせいである。そこで引いた風邪をこじらせて肺結核になった。なぜユダヤ人青年がドメニコ派修道院の図書室なんかで勉強しなければならなかったのか。町のユダヤ人社会の魂の番人であるハシッド派のラビによると、ドイツ語は毒で、毒を扱えるのは薬屋だけ、そういう特殊な職業に就く者以外、これを学ぶことは大罪(Todsünde)だという(S.157)。ドイツ語は啓蒙の言語で、啓蒙は宗教の敵だからだ。青年の夢も、夢実現のための努力も、東欧ユダヤ人社会では人目を憚るのである。

ドイツ語の蔵書があって、密かに勉強出来る場所は修道院しかない。幸い門番のルテニア人(ウクライナ人)が幼い頃からの顔馴染みで、その手引きによって内緒で図書室へ入れてもらい、レッシングやシラーと出会って、ようやく学習の場を見出したというしだいであった。彼の行く手を阻んだ病は、ドイツ語を学びたい若者を極寒の修道院図書館へと追いやった東方ユダヤ人社会の宗教的頑迷がもたらしたものである。

東欧ユダヤ人の敵は、内と外にいる、健全な開化を妨げるユダヤ人自身の狂信と蒙昧、それと、周辺非ユダヤ人による差別と偏見、この二つである、とフランツォースは書いていて(S.11)、確かに粗筋を見る限り、東欧ユダヤ人社会の宗教的迷妄の罪は

重い。

しかし、それらとは別に、この小説には、西欧化・近代化の負の側面であるナショナリズムとミリタリズムというもう一つの手強い敵が描き込まれているように思う。

フランツォースの小説に奇抜な苗字が頻出するのはなぜか？

主人公の正式名は Alexander Glatteis だが、町ではもっぱら Sender der Pojaz とか、養母にちなんで Roseles Pojaz と呼ばれている。セnder(Sender) は Alexander の略、ポヤッツという呼び名の由来については既に述べた。これには、かるみ、おかしみ、親しみを感じさせる独特の響きがあるし、呼び名に使われていることも考慮して、「道化(師)」とせず、ポヤッツのままにしておく。

彼の正式の名前を知る者はほとんどない。一つには、父親が、生まれて来る子にはけっして自分のような人生を歩ませないでほしいと遺言して死んだので、シュノラーの子という出生は秘密にされ、Glatteis という姓も伏せられたから、第二には、義母がセnderをあくまでも実子として育てたかったため、もう一つの理由は、東欧ユダヤ人社会では、姓名というのは「出生証明書、徴兵検査通知書、死亡証明書にしか載らない」(S.12)、日常生活では正式名なんて使わないからである。なぜか。

フランツォースの小説で目に付くことの一つは、登場人物の名前が往々にして実に奇抜なことで、Alexander Glatteis というのも、取り合わせがいかにもチグハグで可笑しく、「道化」にはうってつけである。だが、奇抜さだけで言うと Glatteis なんかもだほんの序の口、Weihnachtskuchen, Rindsbraten, Fragezeichen, Galgenstrick などというのが出て来る。確かにこんな名前は日々の生活に馴染まない。

こういう珍妙な名前の背後に何があるのか。

フランツォースには『姓名考(Namensstudien)』³⁾というエッセーがあって、奇抜な苗字の歴史的由来が説明されているので、簡単に紹介しておきたい。

ガリツィア地方がオーストリアに併合されたのは 1772 年、第一次ポーランド分割の際である。その時この地方に居住していたユダヤ人たちも自動的にオーストリア国家に帰属させられた。それまで彼らはオリエントの習俗に従って苗字というものを持たなかった。自分の名前、父親の名前、その後せいぜい一族の出身地が付くぐらいである。たとえば Mosche ben Avruhom Aschkenasi, ドイツ語で言うと, Moses, Sohn des Abraham, 最後の Aschkenasi は一族がアシュケナジム、つまりドイツから来たことを示す。

ユダヤ人にも姓を付与することになったのは、納税と兵役の義務を課し、行政上・司法上の住民管理を行う必要があったからである。

1787 年ヨーゼフ二世による勅令を受けて、宮廷軍事顧問会議から実施委員会に向けて通達が発せられた:ありきたりの苗字は避ける,あたうる限り珍しい名前を選ぶ,一族を出来るだけ多くのグループに分けて,たくさんの苗字を創氏する,作業を急ぐべし。ガリツィア・ユダヤ人版「創氏改名」である。

各地実施委員会のメンバーは軍人4人、法務官1人、民間代表2人。自主的に名前を届け出るようになって、埒が明かないので、住民を呼び出して無理やり苗字を押し付けることになる。数は膨大だから、委員会の方もそう几帳面にばかりはやっておれない。反ユダヤ感情を満足させ、軍人流の諧謔心を發揮して、退屈を紛らす。信仰心篤いラビに **Gottlos** とか **Gottverdammt**, 町一番の大金持に **Bettelarm** という姓を与える。賄賂が期待できそうなら, **Galgenholz** という苗字にするとって先ず脅し, 苦情が来ると, 「事情聴取」と称して, 金品と引き換えに **Galgen** を削って **Holz** にしてあげる, 出し惜しみするようなら, そのまま, といったことが行われた。

1924年にポーランドを旅したベルリンの同化ユダヤ人作家デーブリン(Döblin)も, 東方ユダヤ人の名前の異様さに衝撃を受け, 迫害された民族にこんな「人を愚弄するような名前(Spottnamen)」を押し付けた, と憤慨している。⁴⁾

東方ユダヤ人に名前などない。苗字は無理に押し付けられた贗の名である。(中略)彼らに姓を名乗るようお上が命令したのだ。そんなのが彼らの名前と言えるだろうか。⁵⁾

こう書いたのは, フランツォースと同じ東ガリツィア出身のユダヤ人作家ヨーゼフ・ロート(Joseph Roth)だが, 小説『ポヤッツ』でも, お上から強制された姓は使われず, 皆もっぱら **Vorname** や **Spitzname** で呼び合っている。

奇妙な名前は, 西欧近代の植民地主義とユダヤ人蔑視の現れであり, 日常の呼び名, あだ名はそれに対するささやかな抵抗の徴なのである。

Fehlermacher とは何か?

ずっと **Sender der Pojaz**, **Roseles Pojaz** で通ってきた主人公が自分の正式の名前を知るのは徴兵検査通知書を見た時である。もともと納税と兵役の義務を徹底して課すというところに名付けの目的があった。創氏改名を推進するにあたって中心的役割を演じたのが軍事顧問会議であり, 実施委員会メンバーの大半が軍人で占められていたことは, 先ほど述べたとおりである。ユダヤ人がドイツ名の強制に抵抗したのは, アイデンティティーが侵されることもだが, 兵役義務への恐怖も大きな要因だった。

東欧ユダヤ人が兵役を殊更に怖れ, 嫌うのは, なぜか。

不運にも徴兵されて, 身籠った恋人との仲を裂かれ, 長い軍隊生活の後, 傷病兵として帰還して, 失意と貧困の内に世を去るユダヤ人を主人公とした小説『パルマのモシュコ(Moschko von Parma)』の中で, 作者フランツォースがその間の事情をかなり詳しく説明している。それによると, 先ず, 東方ユダヤ人は勇気がない。恒久的な貧困と同族結婚のために体格が貧弱で, 体力がない, 覇気が湧かないのは当然である。その上, 迫害を受け続け, 忍従(Dulden)が習性となっていて, 勇猛心とは無縁である。第二に, 宗教上の理由, 「汝, 殺すなかれ」だけでなく, 食事や礼拝に関する細かいユ

ダヤ教の規則・戒律が、軍隊に入ると遵守できなくなる。これは重大な罪なのだ。第三に、20歳で徴兵検査を受けて合格すると、7年間(!)の兵役義務が待っている。本人はもとより、貧困にあえぐ家族にとっても、これは死を宣告されるに等しい。これがフランツォースの説明である。⁶⁾

センダーは自分が養子だとは知らず、母一人子一人だから、徴兵は免除されると思っている。結婚して子沢山とか(早婚!), 一人っ子で親の面倒を見なければならぬとかいう立場の者は斟酌されたからだ。しかし戸籍上彼は Alexander Glatteis で、彼が母親だと信じている Rosele Kurländer とは赤の他人、係累のない自由の身である。徴兵する側からすればこれほど後腐れのないケースもめずらしい。ローゼレさんはそのことを知っている。

徴兵を逃れる方策は三つ、賄賂と結婚と Fehlermacher である。

一口に賄賂といっても、徴兵官の買収だけではない。男の子が生まれた時に戸籍係を抱き込んで女の子として台帳に記載してもらい、更には、医者に偽の死亡証明書を書いてもらって三、四年行方をくらます、など、揺り籠から墓場まで手口は多彩である。⁷⁾しかし貧しいセンダーの場合、買収の道は閉ざされている。

結婚という手があるが、半年ほど前に身を固めさせようと、見合いさせた時には、親の気も知らぬセンダーは、役者になる夢で頭がいっぱい、結婚はその障害でしかない。そこでポヤッツの本領を発揮して、見合いの席で悪戯を仕掛け、相手の両親をカンカンに怒らせて、縁談をぶち壊してしまった(S.116ff)。

もしこの段階で事情をすべてセンダーに打ち明け、徴兵の危険が迫っていることを知らせておけば、日ごろから、兵隊に取られるくらいなら、生まれてこなかった方がましだ、と公言してはばからないほどだから(S.155)、気の進まぬ縁談を破談にした要領で、フェーリックス・クルルよろしく、癲癇の発作を真似て見せるところまでは行かないとしても、ポヤッツの名に恥じず、一芝居打って徴兵官たちの目を欺くくらいの芸当は出来たかもしれないのだが、ローゼレさんも周囲の誰も彼に出生の秘密を明かすことだけはしない。

途方に暮れたローゼレさんは、貧乏人の兵役逃れの闇のルート Fehlermacher のところに出掛けて行く。これは文字通り、欠陥作り・キズ作りで、五体満足な青年を五体不満足にして、兵役不適格者に仕立てあげる商売である。

彼女が相談に行った相手は飲んだくれの外科医、その男は次のように言う。

30 グルデン出せば、息子さんの脚の腱を切って一生びっこにしてあげるよ、それとも、もし何なら、指を二本詰めてあげたっていい。(中略) なあに、兵隊に取られるよりヤマシさ。30 グルデンならここまで。もっとはずむっておっしゃるなら、元通りに治せる上等なのもある。(中略) 慢性の胃病なんてお奨めかもしれん。肺結核ならもっと上等だ、本物と見分けがつかん。半年後には治してあげる。(中略) 治療費込みで 100 グルデン! (S.149)

これにはさすがに気丈なローゼレさんもたまげて、ほうほうの態で退散する。

これはフィクションではない。ハイコ・ハウマンの『東方ユダヤ人の歴史』にもボヘミアやモラビアのユダヤ人に関して同様の記述が見られる。⁸⁾

同じ問題についてヨーゼフ・ロートは次のように書いている。

大戦の3, 40年前には自傷行為(Selbstverstümmelung)が東方ユダヤ人の間で猖獗を極めた。兵役をひどく恐れて、指詰めとか、脚の腱の切断とか、目への毒液注入とかを頼んでやってもらった。彼らは盲、びっこ、わに足などの英雄的身障者となり、生涯にわたっての不快極まりない難儀を甘受したのだった。(中略) 明晰な理性に照らしてみても、五体満足で死ぬより肢体不自由のまま生き永らえる方がまだしも得策だと判断したのである。この確信を支えたのは彼らの信仰心だった。カイザーやツァーのために死ぬのは愚かであるのみならず、トラーの教えから外れ、その命令に背く罪でもあった。(中略) 安息日に銃を取り、軍事演習に参加し、罪のない外国人に向かって手を上げる、ましてや刃物を振りかざす、それは罪なのだ。東方ユダヤ人は英雄的平和主義者だった。彼らは平和のために苦しみを受けたのである。彼らは自ら進んで身障者となった。まだ誰もこれらユダヤ人の英雄的行為を褒め称える詩を書いた者はいない。⁹⁾

ユダヤ人による兵役忌避の理由に関して、先に紹介したフランツォースの説明とでは、重点の置き所が違うようだが、これは、同じ東ガリツィア生まれであっても、完全な同化ユダヤ人として育ったフランツォースと、東方ユダヤ人として育ったロートとの差であろう。しかし、ユダヤ人の非戦的態度の根底にフランツォースの挙げているような理由があることはロートも認めていて、更にユダヤ人の場合、平等なのは義務だけで、権利の方は形の上だけのことだ、と批判もしている。

なぜナタンではなく、シャイロックか？

ドイツ文化への憧れということに関しても、奇妙なことがある。

ドイツ語演劇の舞台に立つことを夢見る青年セnderの願いは不思議なことに、ドイツ演劇ではなく、シャイロック役者になることなのだ。彼は修道院の図書室でレッシングやシラーと出会い、„Nathan“や„Die Räuber“, „Kabale und Liebe“などを読むが、ぜひ演じたいと思うのは、それらドイツ演劇ではなく、シャイロックである。ドイツ文化に憧れ、ドイツ語を学ぶユダヤ人青年が、ナタンではなくシャイロックを演じたいとは…。この「ねじれ」とでも呼ぶほかない現象はいったいどう説明したらいいのだろうか。

彼がチェルノヴィッツで初めて出会った舞台が『ヴェニス商人』だったという事情はある。レッシングやシラーを読んだとはいっても、最初はほぼ独学に近く、予備

知識が不足しているので、必ずしもよく理解できなかった、ということも考慮に入れねばならない。

彼が図書室で最初に読んだのはナータン劇で、これについて彼は、会話ばかり多く、アクションや争いがほとんどないとか、いろいろ難癖を付けるが、三つの指輪の寓話で表現されるその理念の素晴らしさには感銘を受ける。

この芝居の倫理的偉大さは彼にもおぼろげながら解った——作者について、〈この人はきっと立派な人間だったにちがいない〉と思った。(中略)それだけに、彼が知っているこの二つの芝居のうち、シャイロック劇ではユダヤ人がひどい目に遭わされるのに、そのシャイロック劇ほどナータン劇を好きになれないことが彼には心苦しかった。どちらを演じたいか、残忍で執念深いシャイロックか、それとも気高く温厚なナータンか、と考えるたびに、彼は気高さからは程遠い人物の方に断固軍配を上げるのだった。(S.104)

彼は更に「ナータンはいつも静かに道理のあることを話すばかりで、激しく悩んだり喜んだりすることがないが、シャイロックはその逆だ」(S.104)という感想も漏らしている。しかし、ナータン劇にも怒りや絶望が書き込まれていないわけではない。

18年前に彼は「妻と前途有為な七人の息子を」¹⁰⁾キリスト教徒(十字軍)によって焼き殺されるという凄まじい体験をしていた。三日三晩、彼は、「神の存在をさえ疑い、怒り、狂い、我が身を呪い、世を呪い、キリスト教徒へのけっして消え去ることのない憎悪を誓った」。しかしやがて理性が戻ってきて、信仰を取り戻し、これもやはり神のご意志だと悟る。かつて幾度も命の危険から救ってくれた恩義のあるキリスト教徒に、生まれて間もない赤ん坊を託されたのはその時である。「私はその子を受け取り、自分の家へ抱いて帰り、赤ん坊の頬にキスをし、跪き、すすり泣いた。神よ、七人をお召しになったが、今はや、一人をお返しくださった」。七人分の愛情をすべてその子に注いで、慈しみ育てることの中で、彼は本来の自分を取り戻し、怒りや憎しみを克服していった。第四幕第七場のナータンの回想は養女レヒャの生い立ち、彼女と聖堂騎士との兄妹関係にも関わる重要な箇所である。

「ナータンは激しく悩んだり喜んだりすることがない」というセンダーの感想は必ずしも正確とは言えないわけだが、ナータン劇では、最も危機的な体験が、克服された過去として回想の形で語られるにすぎず、絶望や怒りや呪いが言葉少なにやや抽象化された形で報告されるだけであるために、センダーが物足りない印象を受けたのだと取れば納得が行く。日々、非ユダヤ人による差別と虐待に苦しむガリツィア・ユダヤ人が、苦しみを克服して叡智にたどり着いた人格者ナータンという立派な結果よりも、冷静さも分別も、金銭への執着までも忘れ去るほどの復讐心に取り付かれて怒り狂うシャイロックという現在形の方に、より身につまされるものを感じ、そこに何か悲劇的な偉大さを見たとしても不思議はない。

「シャイロック劇こそガリツィアのための芝居」(S.312)だと、作中、どさ回り一座の座長が言っているが、東ガリツィア出身の俳優アレクサンダー・グラナーハ(1890-1945)もシャイロック役者を目指した一人だった。彼はガリツィアの首都レンベルクに来て、イディッシュ語劇と出会い、たちまちその虜になって、役者の道を歩み始める。16歳でベルリンに出た時、彼の才能を認めた人物から、もっと広い世界に働きかけるためにはドイツ語演劇の方が有利だと説得され、ドイツ語と演技の猛特訓を受け始める。フランツォースの小説 *Der Pojaz* と出逢ったのはちょうどその頃で、17歳だった。小説が刊行されたのが1905年だから、その2年後ということになる。彼はその時の感激をこう記している。

この小説は私を夢中にした。(中略)主人公は私と同郷ではないか。たちまち私の目蓋には私の故郷の町や村や人々の姿が甦ってきた。この若者も役者になろうとしていた。彼も私と同じ苦勞、同じ計画、同じ憧れ、同じ困難を抱えていた。彼はまた、ある芝居と出会い、それに興奮し、揺り動かされ、芝居の中の異国の人物たちを彼の村、故郷の人々と比べて見た。私も早速それを手に入れ、襲い掛かるようにして読み始め、むさぼり読んだ、いや、向こうの方が私に襲い掛かり、私をのみ込んだのだ。それは『ヴェニスの商人』、シャイロックだった。(中略)私は涙にまみれて、のた打ち回った。シャイロックの身を憐れみ、嘆き、悲みに浸った。(中略)シャイロックは身内も同然に思え、シャイロックとポヤッツと私とが一つに溶け合った。¹¹⁾

「いつの日にか観客に正面切ってこの非道を訴えてやるぞ、そのために我が人生のすべてを懸けるんだ、と決意」¹²⁾する。早速、第三幕第一場でのシャイロックの有名な台詞「キリスト教徒とどこが違う。針を刺しても血が出ない、くすぐっても笑わない、毒を飲ましても死なないとでも言うのか……」¹³⁾を暗記し、俳優を目指す若者たちのサークルで演じてみせる。フランツォースの小説で繰り返し出てくるのもこの部分だ。

グラナーハはその後マックス・ラインハルトの指導を受け、何百人もの応募者の中からただ一人選ばれてベルリン *Deutsches Theater* の一員に迎えられるが、第一次世界大戦に出征、戦後復員してからは、ミュンヘンの *Schauspielhaus* に加わり、1919年、ついに念願のシャイロック役を射止めた。時にグラナーハ29歳。17歳でフランツォースの小説と出会って、この芝居を知ってから実に12年目のことである。

ポヤッツにとっても、グラナーハにとっても、本来は敵役なはずのシャイロックが、法の名の下に不当な差別と虐待を受ける受難のヒーローなのであり、逆にアントーニオ、バツサーニオ、グラシアーノ、ロレンゾーといった光の中を明るく笑いさざめきながら優雅に生きる人物たちの方こそ不当な虐待者、抑圧者なのである。シェイクスピアの詩的才能が、もともとの意識的意図を乗り越えて、そのような解釈をも許すテキストを織り上げてしまっていたということであろう。

根っからの東方ユダヤ人としてガリツィアに生まれ育ったグラナーハと、同じ東ガリツィア出身とはいえ、イディッシュ語もおぼつかない西欧型同化ユダヤ人作家フランツォースの主人公とが、シャイロックに関しては期せずして同じ解釈に傾き、同じ共感を寄せたというのは、興味深い。

西欧近代の光と影

さて、ところで、センダーの兵役問題はどうか決着しただろうか。

来るはずがないと信じて疑わなかった徴兵検査通知書を目にした途端、彼はショックのあまりその場で咯血してしまい、徴兵免除になる。一年後に演劇への夢を打ち砕くことになる同じ病気が、ここでは彼を兵役から救ったのだ。つまり、もし東欧ユダヤ人社会の閉鎖性が彼を極寒の修道院図書館へと追いやり、病をもたらさなかったとすれば、代わりに西欧近代のナショナリズムが、徴兵という形で早々と彼の夢を踏み躪っていたことになる。

Alexander Glatteis という奇妙な名前の秘密もここにあるのではないだろうか。境界を越え出て行こうとする英雄的気概とコスモポリタニズムを意味する Alexander と、西欧近代の植民地主義が押し付けてきた姓、危い Glatteis と、この二つの対立軸の上に成る物語、この小説には、そのような一面もあるのではなかろうか。

平野嘉彦は、フランツォースが「種を異にした家畜でも見るような眼差しで、東欧ユダヤ人の世界に対」¹⁴⁾していた、とまで書いているが、文学テキストに見るフランツォースは、通説とは異なり、けっして西欧近代の単純な賛美者であったわけでもない。「半アジア」ガリツィアを蔑視する軽薄な西欧中心的啓蒙主義者に終始したわけでもない。ハシッド派のラビに代表される偏狭と迷妄を批判する一方で、東方ユダヤ人社会独特の敬虔な宗教的仕来りや多民族社会の陰影に富んだ人間関係を、そして、西欧近代のナショナリズムと植民地化政策に抵抗するしたたかなユダヤ人の可笑しくももの哀しい生き様を、いとおしみを込めて描いている。

フランツォース作品の中の西・中欧も、作者の公的見解とは必ずしも一致せず、自由と平等が実現されたパラダイス、と呼ぶには大いに抵抗のある、問題的世界として描かれている。それは、主人公ポヤッツのドイツ語の師となる二人の人物たち——親切で熱意に溢れ、偏見のない師たち——がいずれも、政治権力と文化の中心から、反逆者、異端者として、辺境の地へと流刑されてきた自由主義思想の持ち主である、というところにも覗える。自らが生み出した偉大な思想や理念を現実のものと成し得ることからは程遠い世界、これがフランツォースの眼差しが捉えた西欧の姿だったのではあるまいか。『ナータン』の理想主義にポヤッツが今一つ熱くなれない理由の一つもその辺りにあるのだろう。

注

小説 Der Pojaz からの引用はすべて、Franz, Karl Emil: Der Pojaz. Eine Geschichte aus

dem Osten, 6.Auflage, Hamburg 2002 からのものであり、本文中にはページ数のみを記す。

- 1) 平野嘉彦 「記号としてのアニマリテイ」 『獣たちの伝説 東欧のドイツ語文学地図』所載, みすず書房 2001年 pp.61-80.
- 2) 伊狩裕 「カール・エーミール・フランツォース『道化師』におけるジャルゴンとドイツ語」, 『ドイツ文学』117号所載, 日本独文学会 2005年 pp.47-60.
- 3) Franzos, Karl Emil: Namensstudien. In: Zwei Geist. Karl Emil Franzos, Ein Lesebuch von Oskar Ansell. Deutsches Kulturforum östliches Europa. 2005, S.87-S.103.
- 4) Döblin, Alfred: Reise in Polen. Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 2000, S.74
- 5) Roth, Joseph: Juden auf Wanderschaft. In: Joseph Roth Werke 3. Gütersloh 1975, S.349
- 6) Franzos, Karl Emil: Moschko von Parma. Berlin 1984, S.95f.
- 7) Franzos, Karl Emil: ebd. S.96f.
- 8) ハイコ・ハウマン(平田・荒島訳)『東方ユダヤ人の歴史』鳥影社 1999年 p.130
- 9) Roth, Joseph: ebd. S.345
- 10) Lessing, Gotthold Ephraim: Nathan der Weise. In: Gotthold Ephraim Lessing Werke. München, Wien 1982 S. 704 この作品からのあとの引用も同一箇所。
- 11) Granach, Alexander: Da geht ein Mensch. 6.Auflage, Augsburg, 2005 S.199f.
- 12) Granach, Alexander: ebd. S.355
- 13)シェイクスピア(小田島雄志訳)『ヴェニス商人』白水社 Uブックス 1999年 p.87
- 14) 平野嘉彦: 同上, p.66

Die Ambivalenz der Ostjuden gegenüber Westeuropa in Franzos' „Der Pojaz“

Tomotaka Takeda

Karl Emil Franzos wird als eurozentrischer Aufklärer betrachtet. Er selbst nennt Deutschland „Paradies“ und Galizien „Halb- Asien“. Er spricht von „asiatische[r] Barbarei“, andererseits von „europäische[r] Humanität“ usw., Galizien müsse europäisiert und aufgeklärt werden.

In seinen literarischen Texten finden wir aber einen anderen Franzos, der den imperialistischen Kolonialismus und Militarismus der Habsburgmonarchie kritisiert.

Sein Held „Sender der Pojaz“, der in der jiddischen Welt aufgewachsen ist und seines Nachahmungstalents und seiner Eulenspiegeleien wegen Pojaz(Bajazzo) genannt wird, wird eines Tages vom deutschen Theater begeistert und fängt an, fleißig die deutsche Sprache und Literatur zu lernen, um einmal auf der deutschen Bühne zu spielen.

Er stößt dabei auf zwei Hindernisse, einen inneren Gegner und einen äußeren.

Der erste ist die religiöse Engstirnigkeit. Der Rabbi behauptet, Deutsch sei ein Gift, Deutsch können sei Todsünde. Man muß also geheimhalten, dass man Deutsch lernt. Im Kloster der Dominikaner befindet sich die einzige große Bibliothek des Städtchens mit deutschen Büchern, in der man auch insgeheim lesen kann. Der Pförtner, sein ruthenischer Freund, schmuggelt ihn hinein. Aber der Saal der Bibliothek hat keinen Kamin, und es ist im Winter eiskalt. Die Erkältung, die er sich dort zuzieht, verschlimmert sich zur Tuberkulose, die tödlich sein wird.

Der andere gefährliche Feind ist der europäische Imperialismus und Militarismus. Wenn man bei der Musterung einmal als Soldat aufgenommen wird, bleibt man es 7 Jahre lang. »Sieben Jahr' muß man dienen! Aus wär's mit meinem Plan,(---). Ich glaub', ich würde den Schmerz nicht ertragen!«, sagt Sender. Als der Konskriptionszettel kommt, taumelt er, und aus seinem Mund bricht ein Blutstrom. Die Krankheit, die ihn in einem Jahr ums Leben bringen wird, rettet ihn hier vor dem Militärdienst. Wenn ihn der Fanatismus des Rabbis nicht in den eiskalten Saal getrieben und die Todeskrankheit gebracht hätte, hätte schon hier der europäische Militarismus seinen Traum zerstört.

Übrigens weiß der Held, den man „Sender der Pojaz“ oder „Roseles Pojaz“ zu nennen pflegt, dass er offiziell Alexander *Glatteis* heißt, erst als er diesen Zettel sieht. In den Texten Franzos' begegnet man häufig komischen Namen, z.B. *Rindsbraten*, *Fragezeichen*, *sogar Galgenstrick(!)* usw., die alle den Juden von Galizien Ende des 18. Jahrhunderts von der Behörde aufgezwungen worden sind, was als Grundlage der Besteuerung und Rekrutierung nötig war. Die Familiennamen stehen aber nur in dem Geburtschein, dem

Konskriptionszettel und dem Totenschein, und im Alltagsleben nennen sie sich einander per Vornamen oder Spitznamen: eine kleine Rebellion gegen die Kolonialisierung.

Senders zwei brave Mentoren in der deutschen Sprache und Kultur sind ein Demokrat und ein Freidenker, die aus dem politischen, kulturellen Zentrum Europas als gefährliche Rebellen zur Ostgrenze der Monarchie verbannt worden sind. West- und Mitteleuropa kann man eben noch lange nicht „Paradies“ nennen. Da ist es noch weit, bis man seine eigenen großartigen Gedanken und Ideen realisieren können. Nicht zuletzt deshalb interessiert sich Sender nicht so sehr für den idealistischen „Nathan“ wie für den realistischen „Shylock“.

Das ist das West- und Mitteleuropa, das sich in Franzos' literarischen Texten spiegelt.